

# 一橋大学年譜

## Ⅱ

昭和20年1月—昭和63年12月

一橋大学

平成16年

## 序 文

一九七六（昭和五一）年に刊行した『一橋大学年譜Ⅰ』（明治八年八月―昭和二年三月）につづいて、ここに、終戦の年一九四五（昭和二〇）年から昭和の終わり一九八八（昭和六三）年までの期間の一橋大学に関する諸事項をまとめた『一橋大学年譜Ⅱ』（昭和二〇年一月―昭和六三年二月）を刊行するはこびとなった。

年譜一般がそうであるように、本『年譜Ⅱ』においても、対象期間における一橋大学の多面的な歴史が通観できることに配慮して、慎重に適切な項目を過不足無く取捨し選択し正しく記述するように努めた。とは言え、紙幅の制約のために、割愛せざるを得なかった事項は少なからずある。関係者のご批判とご教示をお願いすると共に、本『年譜Ⅱ』が、前回の『年譜Ⅰ』と相俟って、一橋大学の歴史を通観するのに資することを希望する次第である。

本『年譜Ⅱ』の作成の必要性は、『一橋大学学制史資料』（戦後部分）の編纂作業を進める過程で、故米川伸一教授から既に指摘されていた。しかし、そのための資料の収集・整理に本格的に取り組んだのは、『学制史資料』の編纂作業が終わった一九九一（平成三）年、中村政則委員長の下においてであった。当初、本『年譜Ⅱ』は『一橋大学百二十年史』（一九九五年刊行）と同時期に刊行を予定し、学園史資料室松村美子さんを中心に、資料の整理作業が鋭意進められたが、全体的な草稿が出来上がったのは一九九六年であった。

この草稿を基に、細谷新治名誉教授が、貴重な時間を割いて、そして細心の注意を払って、項目の取捨選択、新項

目の追加、文章の推敲等、原稿のチェックを行った。さらに、二〇〇三（平成一五）年の最終段階では山内進教授と西澤保教授、そして池間が加わって、最終稿を作成することができた。なお、全ての期間を通じて、附属図書館・事務局の方々には、資料の提供・調査、疑問点へのご教示等に多くのご協力をいただいた。皆様のご尽力とご協力で厚く感謝するものである。

二〇〇四年三月三日

一橋大学学園史刊行委員会

委員長 池間 誠

## 凡例

一、本年譜は、『一橋大学年譜Ⅰ』一橋大学 一九七六（昭和五二）年刊 に引続き、終戦の年一九四五（昭和二〇）年から昭和の終わり一九八八（昭和六三）年までの期間の、一橋大学に関する諸事項をまとめたものである。

二、年譜上段については、一橋大学と如水会（大学同窓会）に関する事項を記述。

典拠資料については、各項目の末尾に出版番号で表示し、巻末にその資料名を記した。  
典拠資料が複数ある場合は、代表的なものを一ないし二挙げた。

三、年譜下段については、関連事項として教育問題一般、学外（国内外、多摩地区、国立市）問題に関する事項を記述。次の資料を参照した。

『近代日本総合年表 第三版』岩波書店 一九九一年

『学制百年史』資料編 文部省 一九七二年

『学制百二十年史』資料編 文部省 一九九二年

『東京大学百年史』東京大学 一九八四～一九八七年

『戦後史大事典』三省堂 一九九一年

『戦後日本の大学政策・大学問題 年表』労働旬報社 一九六九年

『大学基準協会十年史』大学基準協会 一九五七年

『一橋大学百年史』財界評論新社 一九七五年

『国立市史 別巻』国立市 一九九二年

『資料戦後学生運動 別巻』三一書房編集部 一九七〇年

『一橋新聞』

四、日付が明らかでない項目については「○・ー」あるいは「○月」と表示し、該当する場所またはその月の末尾に記載した。月日ともに明らかでない場合は「この年」と表示し、その年の末尾に記載した。

五、一橋新聞の記事中、講演会・催し物などを予告するものについては、特に中止の記事がなかった場合、実現したものと見做し注記を付して採用した。

六、上段、下段ともに人物の肩書は項目記載時点のものを記した。

七、卒業生の卒年・肩書はできる限り調べたが、不明な場合は省略した。

八、外国人研究者の来学記録について

一九五三年から一九七五年まで

『一橋大学学制史資料 第一〇卷その二』の来学記録から主なものを記載。

一九七六年から一九八〇年まで

『一橋大学ニュース』の国際交流欄から主なものを記載。

一九八一年からは来学者が急増したため、来学者の項目は省略した。

目次

序文

..... (1)

凡例

..... (3)

年譜

..... 1

典拠資料

..... 372

一橋大学年譜 II

(昭和二〇年一月—昭和六三年二月)

二〇〇四年三月二〇日印刷

二〇〇四年三月三〇日発行

編集発行 一橋大学学園史刊行委員会

東京都国立市中二一

印刷 株式会社情報研究社